〔1228〕

氏名（生年月日）	宮崎信嗣（ミヤザキシンジ）（1985年2月15日）
学位の種類	博士(哲学)
学位記番号	文博甲第113号
学位授与の日付	2017年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	**パスカルにおける気晴らしと探求**
論文審査委員	主査　須田　朗
	副査　宮武　昭・塩川　徹也（東京大学）

内容の要旨及び審査の結果の要旨

宮崎信嗣氏から提出された博士学位請求論文「パスカルにおける気晴らしと探求」は、その題名の通り、パスカルの『パンセ』における「気晴らし」概念を軸に、パスカルに固有の哲学的思想を浮き彫りにしようとする研究である。その内容を目次で示せば次の通りである。

序章　この研究について
　第1節　主題、作業、目標の提示
　第2節　「護教論」と表題付きの27ファイル
　第3節　方法の提示
　第4節　問いの提示
第1部　第一の自然の光の段階から第三の自然の光の段階へ
　第1章　気晴らしをめぐる民衆の意見と半端な識者の意見
　　第1節　導入
　　第2節　民衆による第一の正の意見
　　第3節　半端な識者による第一の反の意見
　第2章　気晴らしをめぐる識者の意見
　　第1節　動揺と気晴らし
　　第2節　悲惨、死、無知
　　第3節　識者による第二の正の意見
　　第4節　補足――モンテーニュにおける気を逸らすこととパスカルにおける気晴らし
第2部　気晴らしと知情意
　第3章　気晴らしとアンニュイ
　　第1節　導入

第 2 節　27 ファイルの外部におけるアンニュイ
第 3 節　「空虚」のファイルにおけるアンニュイ
第 4 節　「アンニュイ」のファイルにおけるアンニュイ
第 5 節　「気晴らし」のファイルにおけるアンニュイ
第 6 節　帰結
第 4 章　気晴らしと思考
第 1 節　気晴らしと思考の関係
第 2 節　アウグスティヌスにおける分散とパスカルにおける気晴らし
第 3 節　死後の永遠を考えることと来世における永遠の幸福を探求すること
第 4 節　探求
第 5 章　気晴らしと願望
第 1 節　気晴らしの願望、安息の願望、貪愛
第 2 節　気晴らしの継承と発明
第 3 節　気晴らしと願望の放置――二つの時代
第 3 部　信仰の光の段階と第四の自然の光の段階へ
第 6 章　気晴らしをめぐるキリスト教徒の意見
第 1 節　最大の悲惨としての気晴らし
第 2 節　キリスト教徒による反の意見
第 3 節　付録――ポール・ロワイヤル版『パンセ』26 章「人間の悲惨」
第 7 章　気晴らしをめぐる探求者の意見――気晴らしと賭け
第 1 節　導入
第 2 節　賭けの断章の解釈
第 3 節　探求者による反の意見
終章

以下、本論文の概要と評価を示す。

まず「序章」において本論文の主題、目標、方法、問いが述べられる。それによると本論文は、『パンセ』の解釈を通して「気晴らし」という現象をパスカルがどう評価したかを明らかにする。この場合の「気晴らし」は、日本語の「気晴らし」概念よりも広い。パスカルの考えでは、信仰なき人間たちは休む間もなく気晴らしに耽っている。余暇における娯楽はもちろん、恋愛も学問も権力争いも、さらには、命を賭けて航海や戦争に参加することもすべて、広義の気晴らしと見なされる。むろん気晴らしをしている本人たちは、自分たちの行ないが気晴らしだとは思っていない。ではなぜパスカルはこれを「気晴らし」と言うのか。パスカルによると、信仰を持たない人間は、悲惨のなかにある。ひとは、この世に生まれるや否や、病気、災難、事故、犯罪、虐待、貧困、差別等の災いに巻き込まれる。幸いそうした目に合わなくても、やがて老い、死を迎える。逃れられないこ

うした悲惨から気をそらして、日々の営みに没頭すること。これがパスカルの言う気晴らしである。

宮崎氏によれば、この広義の気晴らしをパスカルは、一つの現象と見たうえで、この現象について複数の理解のレベル、複数の意見の段階を思い描いていた。具体的には少なくとも三つの意見の段階を考えていた。最下層から順番に民衆、すなわち気晴らしに生きている信仰なき人間たち自身の段階、半端な識者の段階、そして識者の段階である。各々の段階の意見にはこの現象に対する是か非かの考えが含まれている。第一章以降宮崎氏は、『パンセ』を解釈しながら、気晴らしをめぐる意見のいわば段階構造を昇っていき、各々の意見の内容を順番に見ていく。そのうえで「人間は気晴らしに生きるべきか」という問いに対し、パスカルが考えていた答えを探し求める。

第 1 章で宮崎氏はまず、気晴らしをめぐる民衆の意見と半端な識者の意見を確認する。民衆の意見によれば、気晴らしは有益な事物をもたらしてくれる。民衆からすると、有益な事物を集めることで人間はやがて幸福になる。それゆえ気晴らしは是である。これに対して半端な識者は、気晴らしが実際には無益な事物の追求でしかなく、そのうえ気晴らしが無数の事故や災難を招くことに気づいている。半端な識者の考えでは人間は外に気晴らしを求めず内面を見つめ、おのれに満足すれば安息が得られ幸福になる。従って半端な識者の考えでは気晴らしは、不幸をもたらすがゆえによくない。

第 2 章で宮崎氏は、気晴らしについてさらに深い理解の段階があると指摘する。これが第三の段階、識者の段階だという。信仰をもたない人間たちが広義の気晴らしに生きる本当の理由は、彼らがある程度自分の存在の悲惨を理解していることにあると宮崎氏は指摘する。人間たちは死や病や無知といった諸々の悲惨に取り囲まれている。もし彼らが気晴らし活動をやめて休息したならば、やることがない彼らは、おのれの悲惨を考えてしまい、大いに不幸になる。気晴らし divertissement は悲惨から彼らの心を逸らす divertir することで彼らを幸福にしているのである。パスカルの気晴らしを宮崎氏はここで、「悲惨を考えることから心を逸らして苦しい情念の発生を防いでくれる空騒ぎ」と定義する。第三段階の識者は、こうして、気晴らしの効能を見抜いている。したがって識者の意見は、半端な識者の意見を覆して気晴らしを肯定する。こうして宮崎氏はテキストを丁寧に読み解き、気晴らしをめぐる三つの意見のいわば弁証法的階層構造を鮮やかに浮き彫りにしてきた。しかもこれらは、いずれも自然の光、すなわち理性に基づく意見だという点を、宮崎氏は強調する。

『パンセ』はキリスト教護教論の企てとして書かれているので、当然のことながら、識者の理性的意見の段階のうえに、さらに、一層高い意見の段階があるはずであるが、宮崎氏は第 3 章から第 5 章で意見の段階の上昇を一旦脇に置く。キリスト教徒の側からする気晴らしの評価を明確化するための、これは準備作業である。第 3 章の題材はアンニュイ ennui である。気晴らしをやめるときに生じる情念をパスカルはしばしばアンニュイと呼んだ。宮崎氏はここでパスカルの時代にアンニュイという言葉が苦悩から退屈まで幅広い意味をもっていたことを裏付けつつ、気晴らしの文脈においてパスカルがアンニュイをほぼ「苦悩」という意味でつかっていたことを突き止める。

ついで宮崎氏は第 4 章で思考と気晴らしの関係を考察する。この章は本論文の圧巻である。気晴らしが悲惨の思考から心を逸らすのみならず、むしろ気晴らしについての思考で心を満たすことが

まず確認される。ついである断章に付された小見出し「数々のパンセ Pensées」が俎上に載せられ、この小見出しにアウグスティヌスの「分散」の発想が関係しているという仮説が提出される。第 3 節では気晴らしを考えることと死後の永遠を考えることがパスカルによって対置させられることが確認され、最後には気晴らしをめぐって新たな二つの意見の段階が示唆される。これらの段階が第 6 章と第 7 章の題材となる。

第 5 章の題材は願望と気晴らしの関係である。宮崎氏はここで、物欲、安息欲、気晴らし欲といった三つの願望を気晴らし活動と比較して、どの願望が実際に気晴らしする本人の意識的な動機か、どれが無意識的な願望かを確かめる。

第 6 章で宮崎氏はいよいよ、気晴らしに関するキリスト教徒の意見の内容を浮き彫りにする。キリスト教徒の意見では、人間は神のもとで始めて安息して真に幸福になることができる。信仰は幸福への近道、というわけである。しかし幸福の問題を度外視しても人間は神を愛さねばならないというのがキリスト教徒の信仰箇条である。それゆえキリスト教徒の意見では、世俗の活動に幸福を求める気晴らしは、好ましくないことになる。このようにして宮崎氏は、気晴らしをめぐるさまざまな意見をたどり、この段階構造の最高段階にキリスト教徒の否定的な意見を据える。パスカルの気晴らし論はこれで終わりになるかに思われた。しかし宮崎氏によると、もう一つ段階があるという。それが第 7 章の題材である。

第 7 章で宮崎氏は、いわゆる「賭けの断章」（S680/L418）を解釈する。そのうえで、気晴らしについてのもう一つの意見の段階を指摘する。それが宮崎氏の言う「探求者」の段階である。信仰なき人間といえども、気晴らしに生きる代わりに、来世において永遠に幸福になる方法がないかどうかを調査探求することはできる。この探求を宮崎氏は一つの賭けと見なす。この賭けは、目の前の日々の仕事や遊びで気晴らししながら生きることに賭けるか、それとも永遠の幸福がないか探求することに賭けるかの賭けである。この賭けにおいては、その配当の期待値は無限の幸福であり、賭け金はせいぜい人生一回分の有限な幸福である。パスカルが編み出した独自の確率論からすれば、この賭けは、探求のほうに賭けるのが無限に有利な賭けなのである。従って、損得という自然の光から見ても、気晴らしを捨てて探求という賭けをしなければならない。こうして宮崎氏は、パスカルのなかに気晴らしに関してキリスト教徒の意見のほかにもうひとつ、探求者の意見の段階があって、この理性的な意見から見ても気晴らしは否定されるという。

終章は以上の歩みを回顧し整理して、パスカルの気晴らし論が是非の反転を繰り返しながら上昇する複雑な階層構造をもつことを浮き彫りにして、終わる。

＜評価する点＞

『パンセ』の原文を、しつこいぐらい丁寧に読解した論文である。その読解を踏まえて論を一つ一つ、まるでレンガを積むように積み重ねていって、最終的に気晴らしをめぐる意見の段階構造を鮮やかに浮き彫りにした点は高く評価できる。『パンセ』はもともと断章の集まりであり、その編集をめぐっては、様々な解釈、様々な版が出されてきた。宮崎氏はそうした文献学的な事情にも精

通しており、パスカルのオリジナルテキストにまで目を通して本論文を仕上げている。その周到さは高く評価できるだろう。また内外の先行研究や二次文献もしっかり踏まえており、手堅さを感じさせる論文である。特記すべきは、気晴らしに関する五段階の階層構造の指摘である。パスカルの気晴らし概念は、これまでも多々論じられてきた。しかしそこに五段階の階層構造が隠れていることは、これまで誰も指摘しなかった。この点の独自性、斬新さは明らかである。とはいえ断章の正確な読みと手堅い文献研究によって、宮崎氏の新しい解釈はしっかりと支えられている。その意味で本論文は、今後のパスカル研究に一石を投じる画期的な研究と言える。

なお、パスカルとモンテーニュ、パスカルとアウグスティヌスの違いを論じる箇所からも分かる通り、宮崎氏が古いフランス語やラテン語に精通していることは疑いない。

以上をまとめると、全体としてこの論文は、とてもレベルの高い優れた力作と言える。

＜課題＞

あえて以下課題を指摘する。宮崎氏は今回気晴らしに関するパスカルの思想内容そのものの豊かさを見事に浮き彫りにしたが、パスカルが意図していた護教論全体のなかでその気晴らし論がどんな意味をもつのか、護教論の他のテーマとどう関係するのかといった、さらに立ち入った考察がいささか不足している。この点を加味すれば、論文はさらに厚みをもつことになったであろう。今後の課題である。

またパスカルはさまざまな概念を必ずしも論理的に厳密に使っていない。その意味の揺れは、哲学的にみると一種の曖昧さと言えなくもないが、他方で、これらの表現は概念とメタファーの中間にあるとも言える。そのコノテーションの豊かさを概念的な厳密さで切り分けていくと、パスカルの表現の文学的な魅力が失われかねない。その点への配慮がもう少しあってもよかったのではないか。

もう一点は、日本語表現についてだが、論理的な明晰さを追求するあまり、日本語表現の美しさを犠牲にしている箇所がところどころ見られた。明晰な文を書けば、それでよいというものではない。読者を配慮した簡潔な文章をしたためなければならない。そうすれば、この論文はいっそう優れた作品となるであろう。

このような課題を含んではいるものの、本論文が、構成上の巧妙さ、テキスト読解の的確さ、解釈の斬新さ、議論展開の論理的明晰さ、内外の第二次文献や先行解釈への目配りなどを十分備えており、高く評価できるものであることは疑いえない。

以上、本論文の内容審査と口頭試問の結果、本論文の審査にあたった三人の委員は一致して、本論文に博士学位（甲、哲学）を授与することが適当と判断した。